

れんぎ
認定特定非営利活動法人 日本雲南聯誼協会

【東京本部】〒162-0846 東京都新宿区市谷左内町4 3階
Tel: 03-5206-5260 Fax: 03-5206-5261
E-mail: yunnan@jyfa.org URL: http://www.jyfa.org/

【昆明代表処】中国雲南省昆明市人民東路289 号集大広場2011室
Tel. +86-871-63311468 Fax. +86-871-63320658

f http://www.facebook.com/NPO.JYFA @jyfa

ブログ 雲南の郵便屋さん

検索

編集・発行人 初鹿野 恵蘭

印刷協力 昭和情報プロセス(株) (株)技術評論社 / デザイン Hope Company



Japan Yunnan
Friendship Association

彩雲の南

第91号

会
報

発行日 2026年（令和8年）2月15日

日本雲南聯誼協会設立二十五周年

心からの感謝を込めて

四半世紀の歩みを糧に
次なる未来へ新たな一歩を



皆様と共に育んだ 「日本と雲南を絆の架け橋」

新年あけましておめでとうございます。

日本雲南聯誼協会は、昨年、創立二十五周年という節目の年を迎え、大阪・関西万博関連の活動や日本国内での交流事業など、協会大宮支部をはじめ多くの皆様の支えを力に、各地で活発な活動を展開することができました。改めまして、これまで協会の歩みを支えてくださった会員の皆様、関係者の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

振り返りますと、この二十五年の道のりは、決して平たんなものではありませんでした。それでも私たちは、協会の役割と強い信念を胸に、雲南省少数民族地域教育支援、そして日中の文化・経済交流、雲南各地域からの来日支援など、一つひとつのご縁を大切に、活動を積み重ねてまいりました。

創立二十五周年記念式典では、全国各地、さらには中国・雲南省からも多くの皆様にお集まりいただき、再会と語らいの時間を共有できました。それは、協会にとって25年間で紡いだきた絆を実感する機会

となり、何にも代えがたい財産となりました。

こうした長年の取り組みの中で、時を経て見えてきた成果もあります。「25の小さな夢基金」を通じて支援した女子生徒たちは、進学、就職、結婚、出産を経て、故郷で社会を支える存在へと成長しています。昨年は、夢基金里親サポーターと成長した元生徒が、雲南省で再会を果たし、支援が人生に寄り添ってきたことを実感する、感動的なひとときがありました。経済的な支援だけでなく、「応援されている」という心の支えが、彼女たちの人生に大きな影響を与えたこと、そして今も感謝の気持ちをもち、私たちは大変うれしく、誇りに思っております。

2026年は、こうしたご縁を「再会」と「対話」へとつなげる一年にしたいと考えております。雲南現地のスタッフやボランティアの協力のもと、「50の小学校プロジェクト」や「25の小さな夢基金」のフォローアップ事業。青少年人材育成事業を通じた、若い世代が主役となる新たなつながりの構築、雲南文化に触れる交流事業などを進めて参ります。

協会は本年も、希望と信念を力に、一步一步着実に歩んでまいります。本年が皆様お一人おひとりにとって、健やかで実り多く、新たな出会いに恵まれる一年となりますことを、心よりお祈り申し上げます。

日本雲南聯誼協会 理事長 初鹿野 恵蘭



↑ 2000年6月 設立大会（京王プラザホテル八王子）



↑ 2015年8月 創立15周年記念式典（京王プラザホテル）

25の小さな夢基金

海を越え、山を越えて 結ばれた絆

里親サポーター
王静様

9年前、日本雲南聯誼協会青少年交流部長の董紅俊先生のFacebookで、日本雲南聯誼協会の「25の小さな夢基金」の記事を偶然目にしました。そこに綴られた善意と温もりは、瞬く間に私の心の最も柔らかな部分に触れました。記事に導かれるように協会の公式サイトを開くと、初鹿野理事長が協会を設立した際の初心が画面から伝わってきました。国境を越えた思いやり、そして山の子どもの夢を照らそうとする心に触れ、私は「重みのある温もり」とは何かを

理解しました。その時、私もこの善意の輪に加わりたという思いが芽生えたのです。

沙小花さんは、私が初めて支援した女の子です。私たちは一度も会ったことがありませんでしたが、何通もの手紙を通じて、お互いの生活を共有してきました。私は手紙で山の外の世界について語り、彼女は手紙でイ族の村の星空や山一面に咲くソマ花、そして知識への渴望を綴ってくれました。紙の上を走るペン先の音は、私たちを繋ぐ最も心通じ合う伴侶となりました。月日はあっという間に流れ、気づけば7年。小花さんは無事に高校を卒業しましたが、私たちの文通が途切れることはありませんでした。行間に溢れる情愛は、いつしか静かに根を張り、芽吹いていたのです。

2025年の夏、私は家族を連れて雲南省を訪れ、ついに小花さんと会う機会を得ました。初めて対面する時の不安は、視線が合った瞬間に消え去りました。彼女は美しいイ族の民族衣装を身にまとい、高原の陽光のように明るい笑顔を見せてくれました。「お姉さん」と呼ぶ彼女の声に、私の心は温かさで満たされました。私たちはまるで昔からの親友のように手を取り合っ



←イ族の民族衣装の沙小花さん

す。そして、どんな小さな夢も守られる価値があること、どんな小さな善意も前を照らす光になることを教えてくれた小花さんに感謝します。これからの日々、この愛が麗江のせせらぎのように絶えることなく、高原のソマ花のように鮮やかに咲き続けることを願っています。

里親サポーター 王静

※第92号では沙小花からの感謝のお手紙をご紹介します。

25の小さな夢基金

2006年、10名の少数民族女子高校生への学習支援から始まった本プロジェクトは、雲南省の省都・昆明市にある昆明市女子中学（日本の高等学校に相当）の春蕾クラスで学ぶ女子高生の学費を、1対1で支援する取り組みです。これまでに支援を受けた生徒は1,500名を超え、支援に参加した里親サポーターは300名以上にのぼります。卒業生の多くは大学へ進学し、現在はさまざまな分野で活躍する人材へと成長しています。

あなたの支援が誰かの「夢」に変わる

新規会員募集 日本雲南聯誼協会と共に
歩む仲間を募ります

お問い合わせは東京本部事務局まで

電話 03-5206-5260（平日10-17時）

FAX 03-5206-5260（24時間受付）

メール: yunnan@jyfa.org

温かい
ご支援を



←姉妹のような王静さんと沙小花さん



50の小学校プロジェクト フォローアップ報告

15年を経てなお、 学びの拠点として輝く校舎

現地
報告

第21校目 日中友好尋甸県老村僑心小学校

第21校目・老村僑心小学校の今。世代を超えて受け継がれる「教育の灯」

建設から15年以上を経て

老村僑心小学校は、日本雲南聯誼協会が海外華僑関係者と連携し、2010年に建設した小学校です。以前は校舎の老朽化や教室環境の問題により、児童の安全と学習環境に大きな課題がありました。

校舎は、建設から15年以上が経過した今もなお、学校の主要な教育施設として使用されており、村の教育活動を支え、校庭や学習環境も整備され、児童たちは落ち着いた環境の中で学習に取り組むことができます。

現在の学校・児童の状況と課題確認

今回、馬さんは陳微校長および教職員の皆さんと面談し、以下について意見交換を行いました。



↑ 綺麗に大切にされている校舎



↑ 竣工記念碑は今も大切にされています。

- ・現在の児童数および学習状況
児童数：37名、卒業生：約500名
- ・校舎・設備の使用状況と経年による課題
- ・教育活動を継続する上での現実的なニーズ
- ・今後、外部支援が有効となる分野について

学校側からは、「基礎的な教育環境は安定している一方、教育内容の充実や児童の将来を見据えた支援について、引き続き社会の支えが重要である」との声が寄せられました。

協会への感謝の言葉

教職員からは日本雲南聯誼協会による長年の支援に対し、「協会の援助は、校舎の建設だけでなく、子どもたちに“学び続けられる環境”を残してくれました。今日まで学校が安定して運営できているのは、その支えがあったからです。」と感謝の言葉がありました。

児童たちからも訪問した馬さんに対し心のこもった歓迎の言葉が寄せられ、教育支援が世代を超えて受け継がれていることを実感できた訪問となりました。

フォローアップ事業の意義

日本雲南聯誼協会では建設後も学校の現状を継続的に把握し、「建てて終わりにしない支援」を大切にしてきました。

今回の訪問は、老村僑心小学校が現在どのような段階にあり、今後どのような支援が必要かを再確認する重要な機会となりました。

協会は今後も、現地の実情に即した形で教育支援の在り方を検討し、子どもたちの学びを長期的に支える活動を続けてまいります。



開校式の当時のエピソード



赤土の道を越えた熱烈な歓迎

2010年5月23日に行われた開校式には日本から支援者・会員ら11名が参加しました。老村村は標高が高く「赤土の段々畑」広がる美しい場所ですが、一方で極めて貧しい山間部に位置しています。

子どもたちによる出迎え

会場に向かう道中、村の入り口では、色鮮やかな民族衣装に身をまとい、両脇に整列した子どもたちが「ニーハオ！」と元気な声で日本の訪問団を迎えました。その素朴で懸命な眼差しは、参加者の心に深く刻まれたといえます。



← 1年生から3年生までが学ぶ



→ 生徒たちは整備された校庭で満面のポーズ



↑ 中央 昆明代表処・馬さん

赤いスカーフと感謝の言葉

式典では児童代表が、参加者一人ひとりの首に感謝の印である「赤いスカーフ（紅領巾）」を巻き、支援に対する謝辞を述べました。老朽化し、屋根がたわみ窓ガラスも割れていた旧校舎から、安全な新校舎へ移れたことへの喜びがぱっとその場を包んだ瞬間でした。

夜まで続いた交流の輪

式典後の夜には、民族衣装をまとった村人たちが大勢集まり、歌と踊りの交流会が行われました。街灯もない暗闇の中深夜まで交流が続き、訪問団は子どもたちが新校舎の教室に敷いてくれた段ボールと寝袋で一夜を共にし、深い絆を感じる一日となりました。

学校の背景

この地域はイ族が人口の約41%を占めており、当時の農民の平均年収はわずか807元（当時のレートで約1万2千円）という厳しい環境でした。この第21校目の開校は、単なる建物の寄贈ではなく、厳しい環境に置かれた子どもたちが「外の世界」と繋がり、夢を描くための大きな希望の光となりました。

50の小学校プロジェクト

雲南省山岳地帯に50校の小学校を建設することを目指した支援事業。2000年に第1校目が開校して以来、日本の支援者と現地の絆を礎に建設が進められ、これまで25校の小学校を建設。単なる校舎の寄贈に留まらず、開校式を通じた住民との交流や、フォローアップ事業も行い、日中草の根交流の象徴的なプロジェクトとなっています。

開校式の概要

日時：2010年5月23日

場所：雲南省昆明市尋甸（じんてん）回族
自治県 甸沙郷 老村村

支援内容：鉄筋コンクリート造2階建ての新校舎、
および児童用シャワー室の建設

支援者：國武豊喜氏、蒲池真澄氏、
九州電力株式会社、及び協会会員の皆様



フォトグラファー：比屋根悠亮

まだ見ぬ 雲南の絶景

新連載 第1回

中国の風景や文化を精力的に発信しているフリーランスのフォトグラファーの比屋根悠亮さんが雲南で心を動かされた幻想的な景色を美しい写真と瑞々しい言葉でつづる新コーナーがスタートします。

第1回は無量山の桜を舞台に、旅の記憶と共にお届けします。

雲南省無量山。そこは12月に桜が咲き誇る、少し不思議な場所です。一年前にその存在を知り、ずっと訪れる日を待ち望んでいました。2025年の12月、ようやく足を運び、その風景を撮影することができました。

日本から、まずは雲南省の昆明に到着。そして高速鉄道で大理へ向かいました。大理は12月とは思えないほど暖かな気候で、12月に桜が咲く理由を感じ取れました。大理からさらにバスで南澗へ移動。いくつもの行程を重ねた末、ようやく無量山へと辿り着きました。

「無量山桜花谷」と呼ばれるこの桜スポットは、広大な茶畑の中に桜が植えられており、茶畑の深い緑と桜のピンクが織りなす風景はまさに絶景でした。園内にはいくつか展望台があり、いろんな角度から桜を鑑賞できます。

桜の鑑賞エリア内には少数民族が運営するレストランもあ



比屋根さんのYouTubeチャンネル
www.youtube.com/@tony_trip

ります。「跳菜」と呼ばれる音楽を鳴らしながら、スタッフが肩車をして料理を運んでくる伝統的なおもてなしを受けながら、食事を楽しむことができます。

帰り道、少数民族のご家族が営む民宿で食事をしました。ついでに台所などの裏側も見せてもらいと、小規模ながらも豚や鶏といった家畜を飼っており、彼らの生活スタイルを垣間見ることができました。そこでは、82歳になるおばあちゃんが黙々と薪を割っていました。言葉が通じるか不安でしたが、話しかけてみると、おばあちゃんは中国語（標準語）を話し、私の標準語もしっかり聞き取ってくれました。

翌日の早朝、まだ薄暗い時間帯に、再び無量山桜花谷へ向かいました。やがてオレンジ色の柔らかな光が山々を照らし、少しずつ周囲が明るくなっていきます。その時、雲海が発生していることに気づきました。私はすぐにドローンをセットし、桜と雲海、そして朝の光が織りなす幻想的な写真や映像を撮影することができました。それは言葉では言い尽くせないほど美しく、本当にここへ来て良かったと思う風景でした。



雲南省無量山桜花谷。12月に咲く桜の絶景スポット



健康の秘訣は、雲南の自然に囲まれた環境で素朴な生活



二日目の早朝、雲海が出現し、ドローンをを使って、雲海と桜の風景を撮影することができました



時を忘れ、絆を深めた冬のひととき

雲南の味を囲み、心を通わせた忘年会



● 懐かしい笑顔が集結、雲南料理を囲んで和やかに開幕

2025年の忘年会は法人会員で長年ご支援いただいている「中国雲南酒膳坊 過橋米線」（東京都千代田区）を貸切りにして12月7日に総勢30人、和気藹々と久しぶりにお会いする方々も多く交流を深めました。

司会進行は私、森正一郎、通訳は寺内明子大宮支部長が担当し、最初に開会挨拶を



↑ 近藤一 名古屋支部長

小松道彦顧問よりいただき、初鹿野恵蘭理事長より挨拶があり、参加者挨拶を名古屋支部近藤一支部長、平田栄一元雲南支部特命支部長にいただきました。

乾杯の発声を遠藤功副理事長がされて賑やかな宴席がスタート。

● 懐かしい写真とクイズで盛り上がる「雲南との縁」



美味しい雲南料理をいただきながら協会にまつわるクイズに答えたり、2013年に雲南省で撮影された映画『単騎、千里を走る』にご出演された俳優・高倉健さんとのご縁を感じられる直筆レターや映画パンフレット、懐かしい古い写真を見て語りました。

● 2025年の活動を讀え合い、歌声とともに締めくくる

最後に高山千代美さんの指導で皆で楽しく合唱したのち、林則幸理事による締めの言葉と中締めで2025年の活動を讀え合い、閉会いたしました。

理事 森正一郎



↑ 平田栄一元雲南支部特命支部長



日中友好会館特別企画展 日本雲南聯誼協会が協力

茶馬古道ろまん

中国雲南省無形文化遺産の世界

昨秋、日中友好会館美術館（東京都文京区）にて、雲南省の無形文化遺産に光をあてた特別企画展「茶馬古道ろまん——中国雲南省無形文化遺産の世界」が開催され、日本雲南聯誼協会は当イベントに協力しました。

茶馬古道は「南のシルクロード」とも呼ばれ、1300年にわたり人・物・文化をつないできた歴史ある道です。本展では、その道沿いに息づく約150点にのぼる多彩な工芸品や職人の技を通じ、悠久の時を超えて受け継がれてきた暮らしと文化の魅力を紹介しました。

開会式出席

2025年10月10日、特別企画展の開会式が開催され、初鹿野理事長をはじめ協会スタッフや関係者をご招待を受けて出席しました。



当日は日中両国の各界から多くのご来賓が出席され、華やかで活気あふれる雰囲気の中で幕を開けました。

民族衣装に身を包んだボランティアの皆さんが運営をサポートし、会場は雲南文化の魅力と温かさにも包まれました。来場者の皆さんの表情には期待と喜びがあふれ、雲南の伝統文化への関心と熱気が感じられました。

また、会場入口では雲南省のスペシャルティコー



ヒーやお茶の試飲販売、手工芸品の展示販売も行われ、多くの方が足を止めて楽しんでくださいました。

会期：2025年10月11日（土）～11月30日（日）

会場：日中友好会館美術館（東京都文京区後楽1-5-3）

主催：公益財団法人日中友好会館、中国雲南省文化和旅游庁

協力：大理市孔雀文化芸術伝媒有限公司、北京美途在線国际旅行社有限公司、認定NPO法人日本雲南聯誼協会

後援：中華人民共和国駐日本国大使館、文京区、文京区教育委員会、国際交流基金、中国文化センター、日本国際貿易促進協会、公益社団法人日本中国友好協会、一般財団法人日本中国文化交流協会、一般社団法人日中協会、一般財団法人日中経済協会、日中友好議員連盟、一般財団法人日本アジア共同体文化協力機構



少数民族支援につながる雲南コーヒー 菊池編集長の視察レポート（後編）

標高1,300mの秘境プーアルのマンチン農園で育まれているスペシャルティコーヒー

前編では、プーアル市の原生林の中で最高品質の豆を育む「マンチン農園」の自然環境を報告しました。今号の後編では、「マンチン農園」代表インタビューを通じた品質へのこだわりや、SDGsの観点からも注目すべき農園の社会的な取り組みについてお届けします。

「マンチン農園」代表の張社長は「コーヒーという作物は生育環境に対する要求が非常に高い。中でも『標高』は品質に大きく作用します。私たちマンチン農園は栽培に適した環境下にあり、フルーティな酸味のものからフローラルな香りを楽しめるもの、また



← 張社長（左）

しっかりしたボディを感じられるものまで幅広く収穫できる。それだけ多種多様な味わいを楽しめる私たちの農園だからこそ、みなさまが私たちのコーヒーを飲んだとき、いつも『なかなか良い味だな』と言ってくださるのではないのでしょうか」と話します。

農園内の「コーヒーノキ」は標高ごとに整然と植えられ、豆の洗浄に使われる水はすべて山の恵みである湧水。あらゆるものが周辺環境や風土に合わせ整えられています。コーヒー業界においてもSDGsが叫ばれる昨今、その在り様は、「眼前に広がるこの農園こそまさに一つの到達点」と感じられるほどでした。

また農園内にはヤオ族、タイ族、ハニ族など様々な少数民族の方も多く働いています。コーヒー豆採取や設備管理において彼



SDGsの観点からもこのマンチン農園の取り組みは注目されている。

らの役割は小さくありません。多様な文化と人種が入り混じる雲南においてこのことは非常に重要で、生活背景が違う人同士の協働という点で、多様化が進む日本でも大いに参考になりそうでした。

さらに今、気候変動の影響で2050年にはコーヒーの栽培地が今より半減すると言われていいます。僕はこの視察を通じ、マンチン農園のあり方にはこうした問題を解決するヒントがあるように感じ、さらには雲南から世界に向けて発信する大きな役割があるとも感じました。

（本誌編集長・菊池宏充）



雲南コーヒーにご興味のある方はこちらのQRコードからご覧ください



↑ 山の湧き水を使い、コーヒーチェリーを丁寧に洗浄します



↑ 菊池宏充 編集長

※スペシャルティコーヒー：一般的に高品質で風味豊かなコーヒーを指し、厳格な基準で評価された最高級のコーヒー。

大宮支部活動報告

上尾に広がる雲南の輪！
あげおワールドフェア
2025 出展報告

大宮支部は10月5日、あげお富士住建ホールにて開催された「上尾ワールドフェア2025」に参加しました。本フェアは埼玉県内で開催される国際交流イベントの中でも参加国最多のイベントとして知られ、今回も多くの方々が来場されました。例年好評の民族衣装の試着体験が今年も大人気。ボランティアの皆さん大忙し！の盛況ぶりでした。また、雲南省や当協会の活動紹介展示も行い、大泉國雄さんと川口邦夫さんが来場者への説明を担当しました。ブースでは、雲南省や中国への旅行経験をお持ちの方々との会話や弾み、来場者との距離が自然に縮まる、実りある交流のひと時でした。

今年は、初の試みとして会場駐車場にて「カレーフェア」が開催され、さまざまな国のカレーを味わうことができたり、各国の遊びや文化紹介、日本の着物の無料体験ができたりなど、会場全体が楽しさにあふれていました。協会ブースにお立ち寄りくださった皆様、そして出展を支えてくれたボランティアの皆様、ありがとうございました。大宮支部長 寺内明子



大宮支部活動報告

大宮支部新年会
世代を超えて深めた絆

去る1月10日、支部長の自宅にて新年会を開催しました。当日は朝から市川さんはじめ、集まったメンバーが手際よく準備を整えてくださいました。

テーブルには、東北・上海・四川料理や、雲南の野生キノコ、自家製漬物を使った家庭料理がずらりと並び、まさに「民以食为天」を体現する豪華な食卓となりました。ボランティア活動中にはないゆったりとした時間の中、1歳の赤ちゃんから94歳の最高齢の方まで世代を超えて交流し、笑顔の絶えない親睦の場となりました。

また、私と李徽さんの誕生日祝いまでしていただき、皆様の温かい心遣いに感謝が尽きません。本年もこのチームワークを大切に、元気に活動してまいります！

大宮支部長 寺内

イベント情報

日本雲南聯誼協会主催 第21回
チャリティーゴルフコンペ

日時：2026年秋
場所：未定

チャリティー忘年会

日時：2026年12月 未定
場所：未定

- 2026年も皆様との絆を深めながら雲南の支援に繋がる温かなイベントを企画しております。
- 詳細は確定次第お知らせいたします。最新情報は当協会ウェブサイトをご確認いただくか、事務局までお気軽にお問い合わせください。

お問合わせ・参加申込

東京本部事務局
TEL.03-5206-5260 (平日10~17時)
✉ yunnan@jyfa.org

イベント報告

第41回
「墨美展」

世代と国境を超え、心を通わす墨の色

水墨画家 故・杉谷隆志先生（日本雲南聯誼協会元専務理事）が主催された同展は、3年前よりヒルトン東京地下一階にあるヒルトピアアールスペースに会場を移して開催されています。今回は2025年10月23日から28日まで、120点あまりの個性あふれる作品が展示されました。出品者は小学生から90代の熟練会員まで、幅広い世代にわたります。勿論、例年のようにプロの水墨画家も出品する見応えのある展示でした。

連日、水墨画の実演、ギャラリートーク、ワークショップ等が開かれ、来場者に好評でした。中には海外からの観光客らしき方々やプロのジャズサクソ奏者、出版関係者等も参加されました。

展示作品に描かれている題材も、花、動物、山岳、人物、仏像など多岐にわたり、雲南省納西族のトンパ文字を取り上げた作品も来場者に好評でした。来年も秋を目処に開催予定です。

名古屋支部長 近藤鋼一



イベント報告

活気溢れる「荔風祭」に協力

雲南の豊かな香りが深圳大学東京校を包んだ一日

深圳大学東京校の「荔風祭」は本年も大変な活気に満ちており、私たちPUREPEAKSも雲南コーヒーを積極的にPRできました。中にはこのコーヒー目当てで学園祭に来られた方もおられ、これからも積極的に雲南のコーヒーの魅力をPRしていきたいと思った一日でした。

『彩雲の南』編集長 菊池宏充



胡波先生の彩雲日和 第2回
日本で出会った「小さな発見」

●きのこの東遊記（蘑菇東遊記）

雲南特産の野生キノコたちが「東遊小隊」を結成。「マツタケ（孫悟空）」「サンタケ（三蔵法師）」「ポルチーニ（猪八戒）」「アヒタケ（沙悟浄）」「キヌガサタケ（白龍馬）」が山海の幸がぶつかり合う、東への新たな冒険の旅「新・東遊記」へと出発します。

本作品は「2025年 アジアIPデザインアワード（東京）」2D部門 優秀賞を受賞しました。



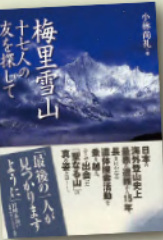
胡波・・・雲南芸術学院卒業、廈門大学で修士取得。長年、漫画家・アニメーション学の教育者として活躍中。現在は東京福祉大学博士課程在学中。協会活動ではボランティアとしてもご協力いただいています。

お知らせ

雲南を愛した23年の軌跡に感謝を込めて
—— 第61回「雲南懇話会」

23年にわたり通算61回開催されてきた「雲南懇話会」は、このたび静かに幕を下ろしました。雲南という広大な土地と人々の暮らし、自然の豊かさを学術と交流を通じて伝えてきたこの会は、京都大学の先輩方を中心とする多くの方々の尽力に支えられてきました。その歩みは、雲南という場所そのものと向き合い続けた旅でもありました。

象徴的なテーマの一つが、梅里雪山主峰カワカブです。1991年、日中合同登山隊17名が雪崩で命を落とす悲劇が起き、日本海外登山史に深く刻まれました。小林尚礼さんは長年現地



← 小林尚礼さんの著書
『梅里雪山 十七人の友を探して』

↓ 険しくも美しい聖なる山「梅里雪山」



→懇話会の会場はいつも満員になるほどの人気でした



に通い、仲間を探し続け、その思いは第61回懇話会でも語られました。

私自身、2006年に講演の機会を得て、雲南と人々、自然への思いを共有する場の重みを実感しました。今回150名を超える友人が集い、再会と感謝を分かち合えたことは、雲南での記憶が今も生きています。

雲南懇話会の歩みに心から感謝を。京都大学の先輩方に敬意を表し、20年にわたり当協会を支えてくださった安仁屋政武会長と遠藤州理事に深く御礼申し上げます。

理事長 初鹿野恵蘭

イベント報告

新年の集いで深める絆
キッツグループ賀詞交歓会に参加

1月6日、帝国ホテル（東京都千代田区）で開催された法人会員の株式会社キッツを含むキッツグループの新年賀詞交歓会に、初鹿野理事長と事務局職員が出席しました。当協会顧問の清水雄輔名誉最高顧問にご挨拶し、長年の支援への感謝をお伝えするとともに、雲南の支援活動や日中交流の意義を改めて共有しました。また、堀田会長や河野社長とも今後の交流について実りある意見交換を行いました。志を同じくする皆様との絆を大切に、本年も活動に邁進してまいります。



← 清水雄輔顧問 左と
初鹿野恵蘭理事長

イベント報告 想いを分かち合う、温かな交流の場

JR総連「2026年新年の集い」

協会法人会員の全日本鉄道労働組合総連合会（JR総連）の「2026年新年の集い」が、渋谷エクセルホテル東急（東京都渋谷区）にて開かれ、鉄道関係者、国会議員の方々や、NPO等の友好団体が集い、新年を祝うとともに友情を深めました。

●ご支援への感謝

JR総連の多くの組合委員の皆さんは20年以上前から、雲南省少数民族の教育支援事業である希望小学校建設に積極的に参加・支援し、日中両国友好に向けた民間交流に力を注いでくださっています。また協会主催のチャリティーコンペや忘年会に参加していただくなど、多方面から温かく支えていただいています。会場で山口浩治執行委員長をはじめ、組合員の方々と再会を果たし、温かいご支援への感謝を直接お伝えしました。



↑ 山口浩治執行委員長

編集後記

前号の胡波先生のイラスト連載に続き、今号から比屋根さんの写真連載も始まりました。誌面の魅力がさらに広がるよう、ビジュアル面でも工夫を重ねてまいります。今後ともお楽しみいただければ幸いです。（編集長・菊池宏充）